
魔法少女リリカルなのはStrikerS～紅き双帝の武人～

ガイア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers（紅き双帝の武人）

【Nコード】

N4904Q

【作者名】

ガイア

【あらすじ】

魔力があるからという理由で誘拐された少年は逃げ出し倒れオーリスに拾われ助けられるその少年はレジアスの力になりたくゼスト達に鍛えてもらう

この小説は地上本部側の武人の物語です

一話 プロローグ

俺はヤマト・アキツまゝ地球の孤児院で管理局に連れ去られて全力で逃げて隠れて逃げてを繰り返してレジアスさんの家の前で力尽きて倒れていたところを

オーリスに助けられ現在レジアスさんの義理の息子になっていますまゝ名前は変えていませんが俺が6歳になるまでにゼストさん・クイントさん・メガーヌさん・ゲンヤさんに合いましたで六歳の今現在ゼストさんに猛烈なお願いをしているところですよ

ヤマト「ゼストさんお願いします！俺を鍛えてください！！」

俺は親父の力になりたいのでゼストさんに鍛えてくれるように頼んでいます、まゝ自分でもしてるよ腕立て・腹筋・スクワット・走りこみとか

ゼスト「ダメだ」

これで十回目ですけどダメなんです、はい

ヤマト「親父の力になりたいからお願いします！」

いやマジでお願いします、ゼストさんが何かを考えた末

ゼスト「・・・わかった」

渋々ながらもOKを貰いました

ヤマト「ありがとうございます！」

その日からゼストさんに鍛えてもらってました・・・まあ最初から腕と足に重りをつけながら基礎の体力をつける為の特訓に俺が選んだ双剣形の

ストレンジデバイスを使つての特訓など、え？杖は使わないのって俺にそっちの才能が全くないの魔力の変換資質がなぜか四つあるし炎熱・凍結・電気・風がある滅茶苦茶レアらしい
それと俺の保有魔力はBランクです

ゼストさんに鍛えられてから一週間が経った頃クイントさんまで参加してきた、重りもゼストさんがさらに重くするし、あとたまに親父がゼストさんと戦つてゐるゼストさんはデバイス使つて戦つてゐる中

親父は拳で渡り合っているしかも小さいクレーターが出来るほどの戦い・・・親父あんた本当に人間？なんで騎士に拳で互角に戦えるの？

ゼストさん&クイントさんに鍛えられて三ヶ月大分慣れてきまし

たしかも親父も時々参加してきます・・・親父は魔力が無いけどチートです前なんかSランク魔道師の犯罪者を無手でフルボッコにしています

そのときに別に魔力無くても関係なくねって思いましたいやマジで

ゼストさん&クイントさん&模擬戦の時にはメガーヌさんそして時々親父に鍛えられて十ヶ月重りはさらに重くなりましたそして模擬戦でゼストさんにフルボッコにされクイントさんにフルボッコにされ

メガーヌさんのガリユーにフルボッコにされ親父にもフルボッコにされています、十ヶ月の間に地上本部の方々とも仲良くなりましたそして皆さんに「俺らの訓練より厳しいのによく耐えられるな」と言われます

まあ好きでやってるし親父の力になりたいし楽しいから別に大丈夫ですよ

それから四年後俺は十歳です、四年間の間に新発見足に魔力を集中させて一気に移動と同時に開放すれば移動スピードを瞬間的にアップできる事がわかったそれと俺の魔力変換を使った良い戦い方も見つかり

魔力で身体強化も出来る事が出来た、魔力を節約して使えるようになった

で今回なんかクイントさんとゲンヤさん家に来いといわれていますすしかもオーリスも

ヤマト「なんなんだろ」

オーリス「わからないわ」

で現在ナカジマ家に着きました、で俺はチャイムを押してクイントさんが出た

クイント「来たようね、さ上がって」

クイントさんの言われたとおり上がってクイントさんについてリビングに行くと四歳と六歳の女の子が居ました

ヤマト「クイントさん俺は貴方が妊娠したとの情報は一切聞いた覚えは無いのですが」

オーリスもうんうんとうなずいている

ゲンヤ「気にしたら負けだヤマト」

まあ別にいいですけど

クイント「スバル、ギンガ挨拶なさい」

スバル「シュバル・ナカジマです！四歳でシュ！」

ギンガ「囃んじゃってるよスバル、ギンガ・ナカジマ六歳です」

スバルは元気の良い子でギンガがまあおとなしい子ね

ヤマト「ヤマト・アキツだ」

で俺は笑顔で言う

スバル・ギンガ「    

なぜ顔が赤くなった？しかもオーリスは少し不機嫌になるし

オーリス「オーリス・ゲイズです」

でも挨拶の時は笑顔なのね

でスバルとギンガに挨拶終了後一緒に遊びました・・・チエス以外で初めて遊びました

そして夕方

ヤマト「では帰らせていただきます」

スバル「ええ！もう帰っちゃうの！そんなのやだー！！」

スバルが涙目になりながら言うギンガも地味に涙目だし

オーリス「ごめんねこれにはちゃんと来るから我慢してね」

ヤマト「まあ俺も定期的に特訓を休んでくるからさ」

スバル「約束だよ」

ギンガ「私とも約束」

オーリス・ヤマト「「ええ（おう）」」

スバルとギンガと約束して帰った

二話 訓練校（前書き）

ガイア 「さて今回は訓練校での話です」

ヤマト 「てことは俺の親友が出てくるのか」

二話 訓練校

ヤマト・アキツ現在13歳になり現在陸士訓練校に入って二年です

ヤマト「なあティーダ訓練校ってつまんないな」

ティーダ「そんなこと言うのはヤマト君くらいだよ」

ティーダは苦笑しながら言う、ティーダ・ランスターは訓練校のルームメイトであり俺の親友、ティアナにも合いました最初はティーダの

後ろに隠れていたけど三十分くらいで仲良くなりました、スバルとギンガ・オーリスも紹介したのでティアナは仲良くなりました、しかもティアナに懐かれました

ヤマト「ティアナは元気？」

ティーダ「話を変えたね・・・まあ良いけど、ティアは元気だよ、そっちこそスバルとギンガは元気なのかい？」

ヤマト「元気すぎるよ」

ティーダ「それはよかった、あとヤマトにならティアナを預けられる」

ヤマト「・・・は？なにを急に言い出すんだ？」

ティーダ「ティア、ライバルは多いし鈍感だから頑張れよ」

ヤマト「おいしいティーダ」

なに急に言い出すんだ

ティーダ「ごめんごめん、で今日もやるんでしょ」

ティーダの目が真剣になる

ヤマト「ああ訓練校でまともに俺と戦えるのはお前ぐらいだしな」

ティーダは天才だと思う、俺の瞬間的移動スピードのアップ瞬^{しゅん}移^いを一週間で覚えたし俺が思いついた魔力の圧縮も三週間でコツをつかみ

二ヶ月で完全圧縮もできるようになりかなりの一撃を与えられるようになった（いまでは砲撃系のロスタイムが5秒、デバイスがあればもはや零になるしかも

10の魔力が必要な魔法にさらに10の魔力を乗せて放つからたちが悪い）

ティーダ「それとゼストさんのことは聞いたよ」

そうゼストさんは俺が訓練校に入って一年の時にクイントさんとメガーヌさんを逃がすためにシュウサイ・アキサメと戦う事になって戦いに敗れたらしい

ティーダ「レジアス中将道を踏み外さなければ良いけど・・・」

ティーダは心配している

ヤマト「心配するなティーダそれは俺が止めた」

（回想）

ヤマト「親父嘘だろその話・・・」

レジアス「嘘では無い・・・クイントとメガーンの話だ」

ヤマト「・・・ゼストさん」

俺は師匠であるゼストさんが死んだ事が信じられない

レジアス「ワシはジェイル・スカリエッティと最高評議会を潰すために手を組もうと思う」

ヤマト「・・・親父！」

俺は親父をぶん殴ったそれに気づき親父もすぐに殴り返してくる

ヤマト「どうしたよ親父・・・いつもの熱い拳はどこ行きやがった！」

そう言い俺は親父を殴る

レジアス「なんだと！」

そう言い返して親父が殴り返す、そしてまた俺が殴り親父が殴り返すのが二十分以上続きようやく終わる

ヤマト「やっと熱い拳に戻ったか親父」

レジ阿斯「フツ、ワシは復讐でゼストと誓った正義を忘れるところだったな」

ヤマト「なあ親父シユウサイ・アキサメを潰すなら分かるがなんで最高評議会なんだ？」

今頃気づいたが

レジ阿斯「シユウサイ・アキサメは最高評議会の回し者だと知ったからだ、根本から潰せば奴も出てくるとな」

ヤマト「なら犯罪者の手を借りずに俺らで最高評議会を潰そうぜ親父」

親父はニヤリと笑いこう言った

レジ阿斯「そうだな」

（回想終了）

ヤマト「まあこんな感じに」

ティーダ「そうかいなら良かった」

ティーダがマジでほっとしている

ヤマト「俺は前から陸に行くって決めてたけどティーダはやっぱり空か海？」

ティーダ「いや僕は最初空を目指してたけど陸に行こうと思ってる別に陸でも執務官になれるしヤマトもいるからね」

ティーダが陸に来てくれるか・・・それだけでもすげー嬉しい
ヤマト「ありがとうティーダ・・・さて演習場に着いたし・・・やるか」

俺は両手両足の重りを外して双剣型のストレージデバイスを構える

ティーダ「そうだね」

ティーダも銃型のストレージデバイスを構える

二人が構えると闘気が炎のように出てくる

先制は・・・やはり俺だ、俺は瞬移を使って懷に潜り込み双剣での一閃、だがティーダは大幅に下がり魔力弾を5発撃つ

ヤマト「はぁ！」

その魔力弾を全て斬り落とす、その斬り落してる間にティーダは圧縮した魔力弾を放つ

ティーダ「いけえ！！」

圧縮されて魔力弾が2発を撃つそれを回避したらティーダが銃口から魔力刃をだし瞬移で近づき一閃

ヤマト「チッ！」

俺はギリギリダメージを最小限に抑えて喰らってしまおう

ヤマト「おいおい強くなりすぎじゃない？ ティーダ」

ティーダ「君の教え方が上手なんだよ」

俺は時計を見る

ヤマト「そろそろ時間だし終わりにするぞ ティーダ」

俺は魔力を炎と雷変えて双剣に纏わせる

ティーダ「なら最高の一撃で今日も終わらそう」

ティーダも銃に魔力を集め圧縮していく

ヤマト「雷炎双激^{らいえんそうげき}！」

ティーダ「バーストショット！」

俺の双激とティーダのバーストショットがぶつかり合って・・・
ギリギリで俺の双激がバーストショットを打ち破った

ヤマト「俺の勝ちだな、まあ続けていれば負けていただろうが」

ティーダ「なに言ってるんだい終わらそうと思えば始まって早々に倒せたのに」

俺達は笑いあう

ヤマト「そんじゃなんか食うか！」

ティーダ「そうだね」

三話 遊園地（前書き）

ガイア「今まで溜めていた紅き双帝の武人を全て投稿するぜ！」

ティーダ「ダメ作者だけどね」

ヤマト「ああダメ作者だけどな」

ガイア「ティーダに言われたくねえ！原作なら死んでるはずの人間に！」

ティーダ「この小説では生きてるから関係ないよ原作の僕は油断があるからいけないんだよ（黒笑）」

ガイア「すみません（土下座）」

ヤマト「感想待ってます」

三話 遊園地

どうもヤマト・アキツ15歳です二年間でティーダと共に三等陸尉になりました・・・早いですね、なんかレジアス中將が暗躍したそうです

それと俺はアームドデバイスの双牙で待機状態は腕輪ティーダはインテリジェントデバイスのスーサイドミラーージュで待機状態はブレスレットを手に入れました

で今回はただオリス・スバル・ギンガ・ティアナを俺とティーダで遊園地に誘ったのでそのために待ってます

ヤマト「一緒に来なかったんだな」

ティーダ「まあね」

ヤマト「・・・ティーダあと一年したら部隊を持たないか」

ティーダ「どうしてだい」

ヤマト「いやたださ部隊を持って隊員を鍛えて地上本部最強の部隊を作りたくなっただけだよ、俺が隊長でティーダが副部隊長」

ティーダ「良いかもしれないね」

それから二分後

ヤマト「来たみたいだな」

スバル「ヤマト兄達早いね」

ティーダ「まあ僕達は集合時間の十分前にはいたからね」

ギンガ「へえ」

ティーダはティアナに念話で話しかける

ティーダ「（ティア、ヤマトはかなりの鈍感だから頑張れよ）」

ティアナ「（ええ）」

ティーダは妹であるティアナの恋を応援しているのであった、
俺達は遊園地の中に入った

ヤマト「そんじゃ行きますか」

俺達は遊園地の中に入る

ヤマト「さてまず最初に何に乗る？」

ティーダ「コーヒーカップかメリーゴーランドあたりが良いと思う
よ」

ヤマト「そうだな」

スバル・ティアナ・オーリス・ギンガもOKを出したのでコー
ヒーカップに向かう

コーヒーカップに乗った回転しだしたらスバルとギンガも回転

させる

ヤマト「嫌な予感しかない」

オーリス「私もです」

ティアナ「あの・・・かなり回ってるわよ」

ディーダ「やばくないか・・・」

スバルとギンガは無邪気に笑いながら回している

コーヒーカップ終了後スバルとギンガ以外はベンチに座っている

ヤマト「・・・気持ち悪い」

ディーダ「あれは確実に酔うよ」

オーリス「あの子達はよく元気で居られるわね」

ティアナ「うう」

スバルとギンガはアイスを買っていき戻ってきました

スバル「はいヤマト兄・ティア」

ギンガ「オーリスさんとディーダさんもうぞ」

ヤマト「サンキュースバル」

ティアナ「ありがとう」

オーリス「ギンガありがとう」

ディーダ「すまないね」

アイスを食べた後はスバルとティアナが乗れない乗り物以外は
全て制覇しました

観覧車は四回乗りましたスバル・ティアナ・オーリス・ギンガが俺
と一緒に乗りたがっていたので、なぜでしょう？

その後みんなを家まで送った

主人公紹介

ヤマト・アキツ（秋津 大和）

性別…男

年齢・階級…原作開始時21歳・二等陸佐

容姿…赤髪黒目で顔は上の下

性格…仲間に優しいが敵には冷酷で容赦はない

保有魔力…B

術式…近代ベルカ

魔力変換資質…炎・氷・雷・風

使用武器…双剣型デバイス

バリアジャケット…グロースランサー？のメークリツヒの衣装を黒にした感じ、知らない人は画像とかで見てください

戦術…双剣に炎などの魔力を纏わせたりする接近戦

好きな物・人…子供・地上本部の皆さん・スバル・ティアナ・ギンガ・ゲンヤさん・ルーテシア・ティータ・料理・これからも増えていく

嫌いな物・人…最高評議会・管理局の上層部

デバイス名…双牙（アームドデバイス）

待機時…右手の腕輪

双剣のモデル…hack／Linkの英雄の双剣の刀身紅くした感じ

性格…主思い

四話 部隊設立&空港火災（前書き）

ガイア 「今回は原作の空港火災にヤマトが介入します！」

ティータ 「クイントさん・メガーヌさん・僕が生きている時点で原作にもないと思うけど」

ヤマト 「流石にダメ作者でも考えがあってやってると思うぞ」

四話 部隊設立&空港火災

どうもヤマト・アキツ16歳です階級は三等陸佐、ティーダが一等陸尉になりました、理由は最近ミッドにSランク魔導師の犯罪者やSランクの次元犯罪者を結構捕まえたのと親父の命で違法施設の破壊反管理局組織の犯罪者の逮捕をティーダとやったのが理由です、これで大丈夫なのか管理局

それと部隊を持つのを許されましたレジアス中将や他の地上本部の方々に許可がでて部隊が出来ました、部隊名は赤狼隊です、俺個人は赤狼の騎士団が良かったんですが

で部隊員の半数以上は『空』と『海』で役立たず扱いされて『陸』に無理やり送られた者たちです・・・『空』と『海』の上層部は腐ってるな、それとこの部隊が出来て今で4ヶ月目です

それと俺とティーダに二つ名が出来ました『紅き双帝』『双帝のヤマト』ティーダは『銃皇』です、あとティーダが執務官の試験に合格しました

ヤマト「書類仕事終了っ」と

ティーダ「なら訓練所に行くんだね」

ヤマト「当たり前だ、それにあいつらは覚悟と信念を持ってるからな」

ティーダ「そうだね」

訓練所

ヤマト「みんな頑張ってるな」

訓練所では近代ベルカの奴は自分の身体を鍛え魔力での身体強化も教えたしミッド式の奴も身体を鍛えさせ魔力での身体強化さらに魔力の圧縮を教えたのでその訓練

ベルカ式にもっとも重要なのは己の肉体であり武器を使うならその武器をどれだけ使いこなせるかだ、だからこそ基礎を鍛えなければいけない俺が毎日基礎が要らないくらい相手を出来れば良いが俺も部隊長だから色々忙しいから無理だ、俺はそれとミッド式にもっとも重要なのはどれだけ魔力を圧縮だと思っている、これはデイーダも賛同してくれた

ティーダ「にしても彼らも最初に比べてずいぶん成長したね」

赤狼隊の隊員は最初は重りを付けて訓練所を100周させたところベルカ式の奴らですら一人を除いてみんな動けなかった

???「ヤマトさん執務終わったんですね」

今話しかけたのが唯一動けたリュウト・ツキジマ15歳だ、リュウトのデバイスはグローブ型の無手のベルカ式 ※史上最強の弟子ケンイチの朝宮 竜斗をモチーフにしたオリキャラです
それとこの部隊では俺のことはヤマトかヤマトさんと呼ばせている、まあ隊長って呼ばれたくないのが原因だが

ヤマト「リュウトか、どうだ訓練のほうは」

リュウト「はいとても充実してます」

ヤマト「そうかその気持ちはかなり大事だからなあ」

リュウト「ヤマトさんってどうやって空戦をするんですか」

リュウトの質問にみんなが反応して聞き耳を立てている

ヤマト「それなら見せてやる」

俺はまず軽くジャンプして風の変換を使って風の足場を作りさらに上へ行き風の足場を使って瞬移などを使って接近戦のできるし
のを見せ終わったら
風の足場でその場で立って下を見る

ヤマト「まあ普通に飛べない俺が考えた空戦の仕方だ、風の変換を使って風で足場を作るそれを使って移動これのおかげで陸戦と同じように俺は戦えるんだ」

みんなに関心された

ティーダ「ほんとある意味規格外だよ君は」

ガキの頃から鍛えてるからな

ヤマト「そんじゃ今から模擬戦やるぞ！」

全員「おお！」

結果一位俺・二位ティード・三位リュウトだった

部隊が設立してから一年二ヶ月で今日は4月29日

ヤマト「あれ今日って確かギンガとスバルが来るんじゃないかってけ」

双牙『そうだよ』

ヤマト「ならそろそろ行きますか」

俺はバイクに乗って空港に向かった

空港に着くまでもう少しの時空港火災が起きた

ヤマト「おいおいこんな時に空港火災かよ！双牙！まず赤狼隊の隊員に連絡を俺は救助に向かう」

双牙『了解！』

赤狼隊は空港火災の通信を聞いてすぐさま準備をして向かって
いる

双牙『今居る隊員全員空港に向かつてるって』

ヤマト「なら俺も早速救助に向かうから指揮官に繋いでくれ」

指揮官に通信で伝える

ある茶髪の指揮官が地上部隊の増援がこないけど諦めず絶対助
けるんや！！と思っていたとき通信が入った

ヤマト『赤狼隊隊長ヤマト・アキツこれより救助に参加する！それ
と赤狼隊の隊員も少し遅れるが来るからそれまで耐えていてくれ』

この通信を聞いて周りの陸士の部隊の人達が盛り上がった

陸士の隊員「ヤマトさんがヤマトさんが来たぞ！さらに後から赤狼
隊が来るコレで大丈夫だ！」

陸士の隊長「よし！赤狼隊が来るまで耐えるぞ！」

俺は突き進む瓦礫などは全てぶっ壊して進みスバルを見つけた
ちょうどその時上からデカイ瓦礫が落ちてくる

ヤマト「邪魔クセー！！風雷牙！！」

俺は左に風の魔力を右に雷の魔力を纏わせてデカイ瓦礫を十回

ほど連続で斬り粉々に砕けた

ヤマト「スバル！無事か！！」

スバル「ヤ・・・ヤマト兄」

ヤマト「良かった・・・」

ちょうどその時白いバリアジャケットの女が来た

ヤマト「ちょうど良いタイミングだスバルを頼む俺は奥の方に人がいないか確認する」

白い女「え、はい」

少し戸惑っていたがすぐに返事をしたのでスバルをたくし俺は奥に進んだ、何名か怪我で動けない人がいたので助けて空港を出た、ギンガの方はクイントさんがいたので無事だった

五話 到着地球の海鳴市（前書き）

ガイア 「この回でレジアス中將の強さの秘密が明らかに！」

ヤマト 「親父の強さの秘密だと!?!」

ティード 「確かに中將の強さの秘密は気になるね」

五話 到着地球の海鳴市

あの火災から二年たち俺は19歳で二等陸佐になるティーダは三等陸佐になりました、赤狼隊は俺とティーダが居なくても活動できるほどの部隊になりました

ヤマト「よし！地球に行こう！」

ティーダ「なに言ってるんだいヤマト」

ヤマト「俺の勘が地球に強い武人がいるって言っているから一年ほど休暇を貰って行こうかなって思ってたな」

ティーダ「・・・なら休暇が貰えたら僕も行くよ」

そして親父の執務室に向かった

ヤマト「親父俺とティーダ一年ほど休暇を貰いたくて来ました」

ティーダ・クイント・メガーヌ・ゲンヤ・オーリスだけなら普通に親父と呼ぶがそれ以外の人がいる場合レジアス中將と呼びます

レジアス「フツヤマトお前のことだ来ると思っていたぞ！地球への転送ポートの準備は出来てある

まず海鳴市へ転送するそれと地球に行くのなら梁山泊への地図を渡すワシとゼストが地球に行ったとき

そこでゼストとワシは修行をつけてもらった・・・そしてなにより！地球は魔道師や騎士の数倍は強い武術家や武人がかなりいる！

そして梁山泊は特Aのマスタークラスの武術家が集っているヤマト

とティーダを強くなるだろう、梁山泊の方々は魔法の事を知っているから安心しろ
それとティーダこれを持っていけ」

親父は銃を出した

ティーダ「これは質量兵器ですか？」

レジアス「ただのモデルガンだ、だがこの中のBB球は魔力で強化すれば相手を気絶させれるだろ」

ティーダ「ありがとうございます」

ヤマト「それじゃ行って来るぜ親父、赤狼隊のほうはリュウトに任せるから」

ティーダ「では行って来ますレジアス中将」

俺とティーダは親父の執務室を出る

レジアス「慢心はしてないようではないようだなによりだ、さてワシは赤狼隊に修行をつけに行くか」

地球に到着

ヤマト「到着、でティーダどこ行く？」

ティーダ「決めてないのかい・・・なら図書館とかで地図やネットで探すとかしたらどうだい」

ヤマト「そうだな」

俺達は図書館に向かった

だが途中の公園あたりで金髪の女性と紫色の髪の女性のが誘拐されそうになっているのを見てしまった

ヤマト・ティーダ「・・・・・・・・・・」

無言で誘拐犯に近づき・・・鳩尾ぶん殴る

誘拐犯A B「「グハッ!？」」

誘拐犯A Bは意識を失う

誘拐犯C「てめえら！」

誘拐犯Cが銃を出した

ヤマト「はいあまい」

俺は誘拐犯Cから拳銃を奪い取る

ティーダ「眠ってくれ」

ティーダが誘拐犯Cの首筋を叩いて気絶させる

誘拐犯D「兄貴！先生を呼ぼう！」

兄貴「分かった、先生お願いします！」

車から覆面を被ったレスラーが出てくる

ティーダ「デカイねえ」

ヤマト「デカイだけでくのぼうだろ」

先生「片づけて欲しいのはこの優男二人か？」

ヤマト「ジャンケン！」

ティーダ「ポン！」

俺がグーでティーダがパー

ヤマト「orz」

ティーダ「じゃあ僕がこの人を相手にするよ」

ティーダがジャンケンに勝ったのでティーダが戦うことになった、ヤマトは金髪と紫色の女性の近くに行った

ティーダ「それじゃ始めましょうか」

ティーダはモデルガンを構える

先生「ふん、遠慮なく！」

覆面を被ったレスラーがティーダを捕まえようとするのを横にかわして頭にモデルガンを付け魔力で強化したBB球を6発撃ち気絶させた

ヤマト・ティーダ「…………弱!?!」

金髪の女性・紫色の髪の女性「驚くところそこなの（ですか）!?!」

金髪の女性と紫色の髪の女性がつっこむ

兄貴「せ、先生がやられた逃げろー!!」

誘拐犯が先生を車に乗のせて逃げ出しました

紫色の髪女性「助けてくれてありがとうございます」

金髪の女性「ありがとう」

ヤマト「気にするな」

ティーダ「そうだよさて僕達は図書館に行こう二人とも気をつけるんだよ」

ヤマト「気よつけろよ、さて行くか」

紫色の髪の女性「あの、私月村　すずかって名前です」

金髪の女性「私はアリサ・バニングスです」

ヤマト「ヤマト・アキツだ」

ティーダ「ティーダ・ランスターです」

俺とティーダは図書館に向かった

すずか「行っちゃったねアリサちゃん」

アリサ「そうね・・・翠に行きましょう」

すずか「うん」

アリサとすずかは翠屋に向かった

図書館で調べ物をした後町の人にうまい喫茶店があると聞いたので向かった

五話 到着地球の海鳴市（後書き）

ヤマト「梁山泊が強さの秘密なんだな」

ガイア「そのとおり！俺の考えは特Aマスタークラス《《マスタークラス＜準マスタークラス・魔導師・騎士のエース《弟子クラス上位だから」

ヤマト「俺は今どのくらいだ」

ガイア「ヤマトとティードは通常のマスタークラスの下でゼストとレジアスはマスタークラスの中だよ」

六話 翠屋の武人

ヤマト「ここだよなティーダ」

ティーダ「話によればね」

ヤマト「だけどさ武人の気配が感じるしかもかなりの強者だな」

ティーダ「今は気にせず入ろう」

ヤマト「だな腹も減ってるし」

俺とティーダは店の中に入った

桃子「いらしゃいませ何人でしょうか」

ティーダ「二人です」

桃子「ではこちらへどうぞ」

案内された席へ向かった

桃子「メニューになります」

ヤマト「オムライスにコーヒーのセットでチョコレートケーキをお願いします」

ティーダ「僕もオムライスにコーヒーをお願いします」

桃子「はい」

少し待ってからオムライス&コーヒーが来た

ヤマト「うまいな」

俺はオムライスを一口食って言う

ティーダ「確かに美味しいね」

ヤマト「この半熟ぐあい完璧だこの分だとチョコレートケーキも間違いなくうまい」

オムライスを食べ終えた後チョコレートケーキを食べましたうまかったです

ヤマト「すみません追加注文ですけど」

そう言っているとウェイターの男が来た

士郎「なんですか」

ヤマト「俺と戦ってくれませんか？」

その場が一瞬凍った

士郎「なんのことでしょうか」

ヤマト「まあ今歩いて来たときもですがなにかの武術の動きで隙が全く無い足運びゼストさんや親父のような強者の雰囲気

どれをとつても貴方が武人だって証拠です」

士郎「なるほど君は何者だい」

ヤマト「赤狼隊隊長ヤマト・アキツです」

士郎「僕は御神真刀流の高町士郎だ」

俺と士郎は握手をしたその後ティーダも士郎に挨拶した後士郎の家に招かれたすぐに桃子さんと料理の話で気が合った

現在深夜2時高町家の道場に俺は双牙を起動して素振りをして
いる（バリアジャケットは着ていない）

ヤマト「さてと士郎さん来ているんでしょ」

後ろから気配がしたので言う

士郎「やっぱりばれたか」

ヤマト「ええ・・・試合でもしますか真剣同士で」

士郎「本気かい」

ヤマト「ええ今の俺が親父やティーダ以外でどれだけ戦えるかが知りたい」

士郎「わかった」

士郎さんは奥に置いてある真剣を取る俺は両手両足の重りを外す

ヤマト「赤狼隊隊長ヤマト・アキツ」

士郎「御神真刀流高町士郎」

ヤマト・士郎「「推して参る！」」

俺は踏み込んで士郎さんの懐に入り左の双剣で切るそれを士郎さんも受け流し切り返すそこからは切りあいだどちらかが切るのを止めたら
切られるその行動を高速で繰り返す

士郎「御神流奥義之式“虎乱”」

士郎は二刀での乱れ切り

ヤマト「チツ双斬」

俺は双剣で高速での乱れ切り

ヤマト「クツ」

やはり経験の差で俺がきつくなり下がる

士郎「御神流奥義之壺“虎切”」

士郎の高速の抜刀術が俺を襲う

ヤマト「ッ！」

俺は双剣をクロスして耐える

ヤマト「あぶねえ・・・」

俺は体制を低くし双牙を逆手に構える

ヤマト「三爪痕！」

俺は瞬移を使って速攻で三角形を描き切る

士郎「奥義之歩方“神速”から奥義之六“薙旋”」

神速によってスピードで勝利薙旋の抜刀からの高速四連撃の三撃で三爪痕を受け流され最後の一撃を首筋につけられた

ヤマト「俺の負けです」

士郎「僕の勝ちだね」

お互い握手をしてこの戦いは士郎の勝ちで終わった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4904q/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～紅き双帝の武人～

2011年6月3日04時05分発行